

田中秀征の一言啓上

首相の読み違いで疑われる政治家の知性

2008年11月27日

麻生太郎首相の漢字の読み違いが話題になっている。

読み違いは誰にでもある。また、知らない字もある。私も子供の頃から、正確に読むことができなくて恥をかいたことが何度もある。

ただ、いつ、どこで、何という漢字を読み違えたかは不思議と鮮明に覚えているから、2度同じ間違いはしていないと思う。

だから、首相の間違いを耳で聞いても、新聞で読んでも、誰にでもあることとそれほど問題にしていなかった。

電車内で子供たちが読み間違いを話題に

ところが先日 JR の車内で、数人の中学生らしき子供たちが、首相の間違いを大声で面白おかしく話していた。私の知っていることもあったが、そこで初めて聞いた間違いもあった。どうやらそれぞれの家庭でかなりの話題になっていることもわかった。

車内の人たちも彼らのほうを見てその話を聞いている。

すると、立っている私の前の座席の夫婦とおぼしき初老の2人がささやいているのが耳に入った。「困ったものね」、「総理大臣だからね」と陰しい顔をして話していたのだ。この話は世間に広く深く浸透してしまっている。おそらく首相の“政策”について関心を持たない人でも、読み違いのことは知っている。少年の1人が言った「麻生さんは漢字が読めない人」という言葉が気になった。

大臣の答弁は担当部門の官僚が書く

ふつう、大臣の答弁は担当部門の官僚が書く。講演の原稿もほとんど官僚が書いている。数字や事実関係を正確にするためには一概にそれを悪いとは言えない。

官僚はひそかに、大臣が字を読めないのではないかと心配している。だからといって、字を教えたり、ルビをふったりするのも失礼だ。

「私が読んでみますので、変なところがあったらご指摘ください」

そう言って原稿を朗読する。自分に間違いがあったら直せと言いながら、実はそれを読むことによって漢字の読み方を教えているのだ。

しかし、時間があればそんなこともできるが、忙しければそのまま大臣は本会議や委員会に出かけることになる。

国会には数多くの読み違いの失敗談が語り継がれている。そんな政治家たちが立派な仕事もしたのだろうが、そんなことは忘れられて読み違いのエピソードだけが残ってしまっている。

麻生首相の場合に問題にされるのは、総理大臣というトップの地位にあること、読み違いが多すぎることの2つだろう。

JRの車内の雰囲気から察すると、首相が立派な政策を打ち出しても多くの人たちが本気で聞いてくれない恐れを感じた。何とかしてもらいたいものである。

周囲が遠慮なく注意や進言を

昔の政治家はわれわれよりはるかに読書家であった。特に指導的な立場に立った人たちは万卷の書に埋もれていたと言ってよい。

石橋湛山元首相は、就任2カ月で病氣退陣の止むなきに至った。退陣表明した日の深夜、官房長官が自宅を訪れると、書齋で経済学の本を読んでいたという。

政治家の判断資料は、(1)自らの体験、(2)視察や意見聴取、(3)情報収集と読書であろう。

読書は体験や視察を短時間で補うもの。そして知識の会得ばかりでなく、深く思索する機会を与える。偉大な政治家はほとんど例外なく読書家だが、それは読書家だから政治家になったということではなく、真剣に政治に取り組もうとしたら本を読まざるを得ないからだろう。

漢字を間違いなく読める人を見ていると、そういう人ほど辞書を引く習慣があるように見える。

今に至って首相にそれを期待するのは無理だが、周辺の人が遠慮なく注意や進言をした方がよい。

おそらく、麻生首相には子供の頃から間違いを指摘する人が周りにいなかったのだろう。ことは麻生首相の個人の問題ではなく、日本の政治家の知性の問題にもなりかねない。

田中秀征(たなか・しゅうせい)



1940年長野県生まれ。東京大学文学部西洋史学科、北海道大学法学部政治学科を卒業。83年衆議院議員に初当選。93年6月に自民党を離党して新党さきがけを結成、代表代行。自民党時代は宏池会(宮沢派)に所属。細川政権の発足に伴い首相特別補佐。第1次橋本内閣で経済企画庁長官。現在、福山大学教授。「民権塾」主宰。最近刊の「判断力と決断力」(ダイヤモンド社)をはじめ、「日本リベラルと石橋湛山」(講談社)、「梅の花咲く 決断の人 高杉晋作」(講談社)、「舵を切れ 質実国家への展望」(朝日新聞社)などの著書がある。